

# 追求活動を育てる共通体験の場の設定

## — 2年 「いねをそだてる人のしごと」 —

大脊戸 若 光

### 1. 指導にあたって

#### (1) 単元について

今日、農村においても、子どもたちが田畑から姿を消し、農作業の実際について知らないことが多いと言われている。都市部では、市街化が進み周囲に田畑を見ることが出来ない人も多く、大人でさえ現在の米づくりの仕事については、曖昧なことがらが多い。本単元では、私たちの食生活を支える人々の仕事について、米づくりを通して理解させ、いねを育てる人の労働が自然の条件と深くかかわっていることを、都市部でくらす本校の児童にとらえさせようとする。毎日の食生活を支えている米が、どのように生産されているか、四季を通して営なまれている農業生産の労働に興味関心を持たせ、農家の人々の仕事への課題意識を持たせることが出来れば幸いである。

#### (2) 単元の目標と単元設計における課題

- ・いねを育てる人々は、智恵を働かせ、自然条件に適応しながら仕事を進めたり、自然災害や病害虫からいねを守るために工夫や努力をし、よりよい収穫を願っていることに気付かせる。
- ・めあてを持って米づくりの仕事を具体的に観察させ、絵や文などで効果的に表現することによって、社会事象の意味に気付いていく能力を養う。

本単元の設計にあたり、次の三点を課題とした。

- ①春から秋にかけて長期間にわたる米づくりの仕事について、羅列的な知識の注入学習におちいることなく、追求的な学習過程にどう組織するか。
- ②田畑を見る機会の少ない本校の児童に、自分の力で追求する場をどう設定するか。
- ③一人ひとりの追求を共同思考にどう生かすか。

#### (3) 児童の実態

本学級の児童38名中、稲かりを見た経験のある子1名、田植え2名であり、農家の児童はいない。学校の行き帰りに田を見たことのある子は7名いたが、米づくりの実際については、「葉を田に植える。」「緑色のものをいっぱい植える。」「たねを田にまく。」など、漠然とした認識をしていた。

米づくりにかかる日数についても、2日～2年などと大きな差異があり、推定する根拠をほとんど持っていないことがわかった。具体観察の必要性を強く感じた。

#### 資料Ⅰ (事前調査4/20)

・お米は、どんなにしてつくり  
ますか。  
・何かを田に植える。  
・葉を田に植える。  
・田にたねを植える。  
・くわやひりょうでつくる。  
・トラクターをつかう。  
・しろかきしたりたがやしたりする。

・お米をつくるのに何日ぐらいかかり  
ますか。  
・2日……2名   ・2ヶ月……1名  
・5日……7名   ・3ヶ月……2名  
・7日……3名   ・170日……1名  
・10日……1名   ・365日……2名  
・21日……3名   ・1年……3名  
・30日……1名   ・2年……1名  
・1ヶ月……2名   ・わからない……9名

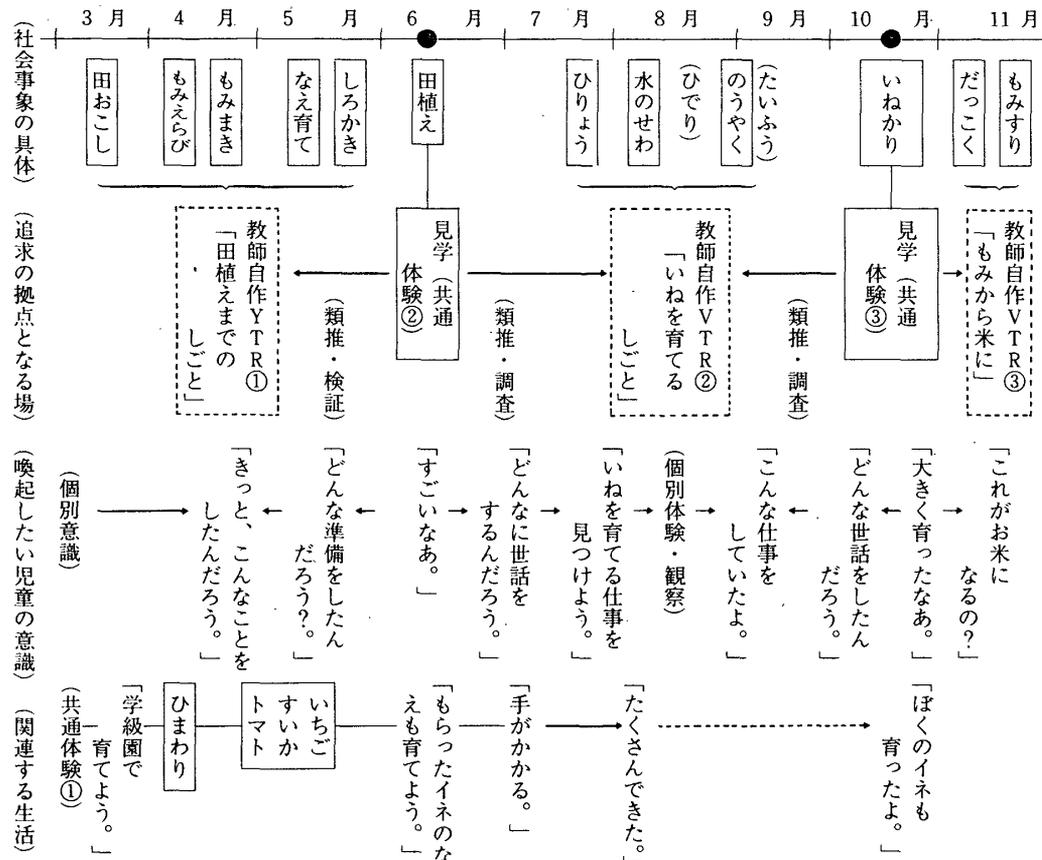
### 2. 指導の方策と計画

どの教科書にも、米づくりの仕事の手順を追って、農家の人々の仕事が紹介されている。しかし私たちが、社会事象としての米づくりを見るのは、冬の田おこしから秋のとり入れまで、長期にわたって休みなく連続する仕事の部分である。従って、都市部に住む本校の児童にも、米づくりの部分をしっかり観察させて、その前後を類推させる学習過程をとることが、めあて意識の芽生えや追求意欲の高まりにつながると考えた。そして、見学(共通体験)の機会は、本校の地理的な位置のため、「田植え」「稲かり」の2回にしぼった。田植えと稲かりには、米づくりのための農業労働の殆んどが集約された事象として現れるからである。

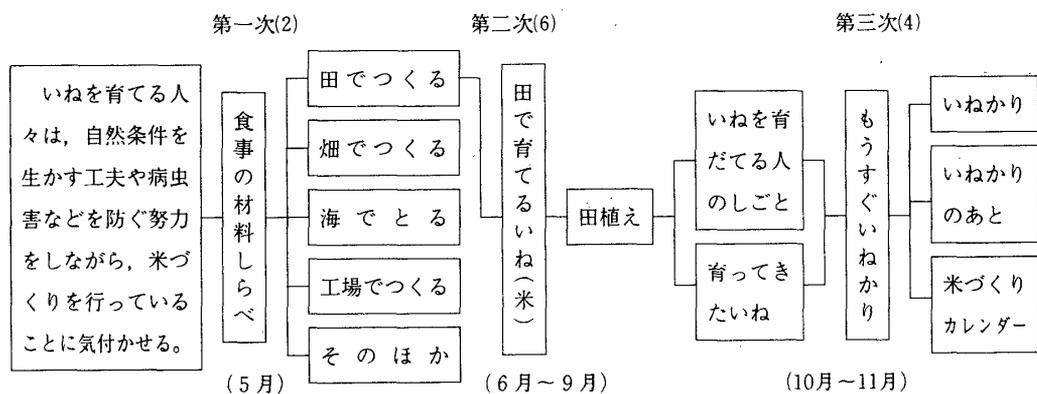
先に述べた、単元設計における課題①②③のそれぞれについて、三つの方策を考慮した。

- 方策Ⅰ 田植え、稲かりの見学や自分たちの畑づくりを共通体験の場として設定すれば、他の農作業についても、追求的な観察活動や思考活動ができるであろう。
- 方策Ⅱ 2回の見学と畑づくりは、一人ひとりの追求の場となるであろう。また、それを契機に休み中等自分の機会をとらえて、個人観察をするであろう。
- 方策Ⅲ 個人観察の内容を一斉学習に位置づければ、一人ひとりの追求意欲の高まり、追求の質も深まるであろう。

**本単元の学習過程を支える基本構造**



**指導内容と計画の具体化.....約12時間**



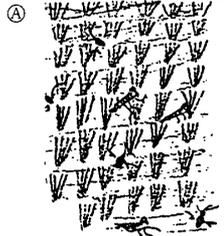
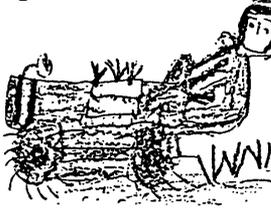
**指導計画作成上の留意点**

- (1) 2回の見学を実施する場として、児童の人数及び日程等から、広島県立農業試験場とする。
- (2) 児童の個人観察の記録は、常用している「はっけんカード」にさせ、提出は強要しない。
- (3) 一時間一時間の一斉学習の目標は、指導内容と児童の意識から定めていく。
- (4) 児童がみつけた米づくりの事象を出来るだけ、授業内容にとり入れるよう工夫する。

### 3. 指導の実際

#### (1) 田植え見学の記録 (6/12)

資料Ⅱ

<p>① </p> <p>見たこともない広い田んぼがどこまでもつづいていました。まるで田んぼの町みたいでした。田んぼの中へ手をつけてみると、なまあたかく、ぬるぬるして、ゲンゴロウやおたまじゃくしがいました。田は日あたりがいいです。</p>	<p>② </p> <p>いねのなえは、ぼくの手のひらくらいで3本ずつうえていました。きみどり色でやわらかそうなほっぱでした。うえたあとを見ると、よこからもたてからもきれいにならんでいました。</p>	<p>③ </p> <p>はたらく人は、田にきかいでうえていました。水の中なので、とても長い長ぐつをはいていました。むぎわらぼうしや手ぶくろをして、あせがいっぱい出ていました。</p>	<p>④ </p> <p>前にうえたなえときょううえたなえをくらべると、前にうえたなえは、太くこいみどり色になっていました。「田にはえいようがあるのだなあ。」と思いました。秋になってまた見学に行くのがたのしみです。</p>
--	---	--	--

#### (2) 田植え見学を生かした授業の記録① (6/17)

##### 本時の目標

農家の人々は、田植えをするまでに、田づくり・育稲等の準備をしてきていることに気付かせる。

T<sub>A</sub> みんなは、田植えをする人たちは「たいへんだ。」と言っていますが、どこがたいへんなのですか。

C あんなに広い田や苗をいっぱい植えるのは、田植え機でやってもたいへんです。おじさんたちは、汗をかいておられました。

C 苗がとてもたくさんありました。田もとても広がったです。

C だから、みんな自分自分の仕事をさぼったらこまります。

C いそがしいのにタニシやゲンゴロウを取って下さいました。

T 生き物をとるのは大へんだと思ったの？

C 広い田にたくさんの苗を植える仕事が忙しいのです。

T<sub>B</sub> では、農家の方が「たいへん」なのは、田植えの時だけでしょうか。

・本時は、田植えの前後の農家の仕事に対する「めあて意識」を生む授業として考えていた。

田植えの仕事の事実 → T<sub>A</sub>仕事の「たいへんさ」 → T<sub>B</sub>T<sub>C</sub>田植えまでの仕事

①

②

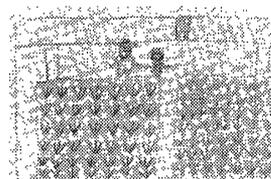
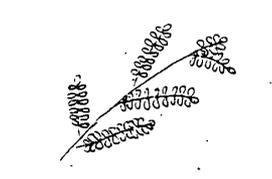
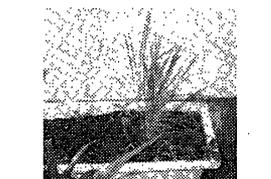
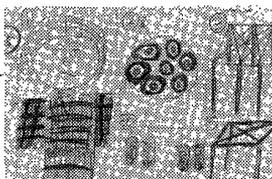
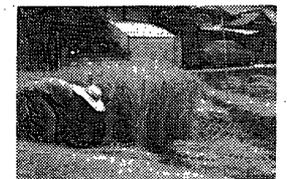
③

上の図のような学習展開となったが、T<sub>B</sub>T<sub>C</sub>によって本時の目標に方向づけていった。この場合、田植えの仕事の事実から、子どもたちが自らとらえた問題とはいえないが、①②③のどの場面においても、田植見学という共通体験が、一人ひとりの発言内容の支えとなっている。「子どもの追求」と「教師のねらい」とがどのように調和して学習が展開したかは、研究主題にかかわる視点である。低学年の学習においては、本時のように教師の示唆によって、児童の意識が教師のねらいに向って推移していくことが多い。その時の追求力の強弱は、事実の観察の質にかかわっている。

(3)個人観察の記録（授業後の個人追求）資料Ⅲ

いねの収穫期や育てる仕事の予想

たしかめよう。仕事を見つけよう。

<p>①</p>  <p>8/13 わたしが、にいがたについたのは、朝の5時ぐらいでした。のうかの人は、田のそばの草をかって、はたらいしていました。会社ではたらく人どちがって、朝早くからはたらくのでびっくりしました。</p>	<p>②</p>  <p>8/20 にいがたのおじいちゃんに田んぼへつれていってもらいました。にいがたは、今年の夏はさむくてほが出るのがおそいといっていました。よく見ると、やっどほが顔を出しているぐらいでした。いつもの年だと、今ごろは、五門玉のようにたれているそうです。私は、夏はあつくないといけないなあと思いました。</p>	<p>③</p>  <p>8/15 おじいちゃんと田んぼへ行きました。おじいちゃんは、毎日水を見に来ます。田んぼのそばに、用水ろがあって水がたらない時は、そこから入れます。雨がふったときは、しめておきます。いつも、いねがかれないように気をつけなければならないそうです。</p>	<p>④</p>  <p>8/24 きょう、いねのはにつけているもみをかぞえて見ました。ぜんぶで、105こぐらいついていた。1つぶのもみが105こにもなるのが、ふしぎでした。おばさんも「すごいね。」といっていました。</p>
<p>⑤</p>  <p>8/8 おじいちゃんが、きかいであぜみちの草をかりました。ほくは、かまでかりました。きかいからは、草のにおいがしました。草は、1mぐらいのびていました。</p>	<p>⑥</p>  <p>8/12 おじいちゃんが、よう水ろの水を田におくりました。「よう水ろの水は、ちかくの川からくるんだよ。」とおじいちゃんが、こたえてくれました。</p>	<p>⑦</p>  <p>8/20 田に行く人は、ながくつやながずぼんをはきます。ながくつは、田のドロの中に入ってもいいためです。ながずぼんは「か」にさされないので、あつくてもがまんしなければなりません。</p>	<p>⑧</p>  <p>8/21 おじいちゃんが、いねがびょう気にならないように、くすりをさんぷしました。マスクをするのは、すこくすりのけむりのためです。</p>
<p>⑨</p>  <p>8/26 いねの長さが人のこしぐらいまである田んぼで、おじさんがのうやくをまいていました。となりの田では、自動草かりきで、草をかっていました。すずめよりテープやおどし目がつってありました。いなほは、だいぶんみのつていました。「こしひかり」という米がとれるそうです。</p>	<p>⑩</p>  <p>8/27 田植え見学でもらったなえがこんなに（しゃんのように）大きくなりました。わたしは、なん回も水をあげました。けれどもすいこんでばかりで、なん回も水をやらなければなりません。せわが大へんです。田とはちがうようです。</p>	<p>⑪</p>  <p>9/20 すずめのおどし方のいろいろをしらべてみました。          ①かかしをたてる。          ②目玉もようをつるす。          ③糸をはる。          ④かんをつるしてならす。          ⑤キラキラ光るテープをはる。</p>	<p>⑫</p>  <p>11/3 私の家の近くの田んぼで、いねかりをしていました。見学した田んぼから比べるとせまいのに3回に分けていねかりをしていました。どうしてかという、少しずつカマでかるからです。          1回目……10月21日          2回目……10月25日          3回目……10月26日          おじさんとおばさんは、ずっとかっています。</p>

「いねを育てる人のしごと」のはっけんカード記録回数 (6月～11月)

資料Ⅳ

1 ○○	11 ○○	21 ○●●●○	31 ○○
2 ○●●●●○	12 ●○●●●○	22 ○●●○	32 ○●●○
3 ○●○	13 ○○	23 ○●●○	33 ○●○
4 ○●●○	14 ○●○	24 ○●●○	34 ○○
5 ○●●●○	15 ○●○	25 ○○	35 ○○
6 ○●○	16 ○●○	26 ○○	36 ○●●●●○●
7 ○○	17 ○●○	27 ○○	37 ○○
8 ○●●●●○	18 ○●●○	28 ○●●●●○	38 ○●○
9 ○●●●●○	19 ●○●●●○	29 ○○	
10 ○●○	20 ○●○	30 ○○	

●は個人観察  
○は見学の記録

①～⑫は、●の中の一枚一枚である。都市部の子どもでも事象に対する「めあて意識」さえあれば、「米づくりの仕事」を観察する機会を持てると言える。左図は、記録として表現されたもののみであり実際には、もっとあると考えられる。これらの個人観察を教師が読みとり、授業でどう深めていくかが課題である。

(4)個人観察を生かした授業の記録Ⅱ (9/12)

資料V 個人観察の内容別分類

田やイネのようす	15まい
農さん薬ぶ	10まい
自分のイネのこ	9まい
田の水のこ	8まい
草かり草除	7まい
すずめ対策など	7まい
取のようす	5まい

(6月~11月)

—本時の目標—  
農薬の散布は、イネの状態や天候を配慮してされることに気付かせる。

T 農薬をまく時のようすについてV T R見たり、道具を見たりしましたね。農薬をまく日は、毎年きまっているのでしょうか。

C だいたいきまっていると思います。

C おじいちゃんに「農薬をまかないの?」と言ったら、「今年は、まだ虫がこないからまかん。」とっていました。

C 虫がきて、それをたいじする時にまくと思います。

T 農薬をまく仕事を見た人に日を聞いてみましょう。はっけんカードでたしかめて下さい。

C 8/21 C 8/26 C 8/16 C 8/3 C 8/18 C 8/10 C 8/22 7/27 ※

C すごくいろいろです。場所によってちがうと思います。

C 8月が7つで、7月が一回です。8月が多いと思います。

C 8月にいちばんよく虫がつくのだと思います。

C 農薬は、虫がきた時にやるのだから、場所によってちがうと思います。

T イネに虫がきたり、病気になった時に農薬をまくのですね。見学した田では、どんな虫や病気だったか聞いてみました。(板書)

C 虫や病気で薬もちがうのですか。

C 薬にもいろいろあるのですか。ぼくたちの病気の時でも、白い薬もあるし、オレンジの薬もあります。

C オレンジの農薬は、ないと思います。

T 農薬は、白く見えますが、中味は虫や病気によってちがうですよ。それでは、農薬をまくことについては先生が聞いてきたことを読んであげましょう。(教師の話を書く)



(板書)  
〈のうやくをまいていた日〉  
・7/27・8/3・8/10・8/16  
・8/18・8/21・8/22・8/26  
〈見学した田では〉

7/31	8/6	8/14	8/25	8/30
夏うんか	イモチ病	イモチ病 モンガレ病	つまぐろうんか	うんか

農薬をまく日は、毎年きまっているわけではありません。毎年3回くらい農薬をまきますが、今年は、5回もやりました。よく虫がわいたからです。毎日、イネのようすをよく見まわっているとイネが元気よく育っているか、病気になっているか、虫がついているかがわかります。そんな時はすぐ農薬をまかないと、全部のイネがだめになってしまいます。ですから、農薬をまく日は、イネのようすをよく見て決めるのです。——農薬は、雨がふっている日や風の強い日には、まけません。雨で農薬が流れてしまったり、風でとばされてしまったりするからです。風のない日の夕方が一番いいのです。農薬は、仕事も大変ですし、イネにもよくないので、あまりやりたくないのですが、やらないとイネが全部だめになるので、この仕事をするのです。  
(県立農業試験場の人の話)

本時では、農業散布についての個人記録を学習ステップに位置づけることを意図してみた。そのひとつは、導入段階で、「農薬をまく日」についての思考を喚起する資料として※「農薬をまいていた日」を各自の記録から出させたこと、次には、後半で「散布と天候」とのかかわりを検証する際に、「散布していた日の天候(風や天気)」を出させたことである。特に低学年においては、子どもたちの個人学習の内容を、教師が意図的に一斉学習に組み入れてやるのが大切である。本時でも、個人学習はよく出来るが、一斉学習では、平素自分を出せない子どもが、自分の見たいこと記録したことについては、自信を持って発表していた。個人学習と一斉学習をどう結びつけていくかは、「追求力を育てる社会科学習」の課題のひとつでもある。

#### 4. 指導をふりかえって

先に述べた、方策Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて実践をふりかえってみたい。

方策Ⅰ 田植えと稲かりの2回の見学(共通体験)が、観察活動や思考活動をうながし、追求的な学習過程を生み出すことになったか。

(1)低学年の子どもが具体観察を好むことはよく言われることであるが、2回の見学に対する期待感強く、田を見る機会の少ない38名のうち2名が、見学以前に田植えを見つけ個人記録を書いている。(資料Ⅳの図回)また、見学後の一斉学習を経た後の個人観察は、38名中25名であり、めあて意識や意欲の高まりが見られ追求活動につながったと言える。(資料Ⅲ)

(2)次に、共通体験が思考活動や追求的な学習過程にどう生かされたかについて、授業記録(6/12)から考えてみる。「あんなに広い田」「苗がとでもたくさんありました。」「田の中はすごくやわらかそうでした。」などの発言は、全員で見学しているので、どの子にも実感できる発言である。田植え以前の農作業について類推思考をする時の共通の事象として学習に位置づいた。しかし、Tc「田植えまでのことですね。ほかにどんな準備があったでしょう。」の発問に対する反応では、見学した事象からはなれた反応が見られる。事実から考えさせていく指導法について課題が残された。次に授業記録(9/12)について言えば、〈みんなが見学した田〉の農薬散布の資料や人の話を全員に等しく示す資料として提示できた。思考活動の内容については、特に共通体験が生きた発言内容は読みとれない。しかし、授業づくりの際、みんなで見学した田、また見学する田を拠点として持つことは、単元構成を楽にし、共同思考をさせやすいと言える。

方策Ⅱ 共通体験の場を持ったことが、共同思考や個人観察をうながす契機となったか。

2回の見学は、子どもたちの意欲を高めることや共同思考の拠点として生きた。そして、田植え見学以後、田や農作に対する観察意欲は高まり、登下校などの機会に注目して見て来た作物を育てる事象を話したり、記録したりするようになった。しかし、意欲はあっても、個人観察の機会の持てない児童については、課題が残った。(資料Ⅳなど)

方策Ⅲ 個人観察の内容を一斉学習に位置づけることが、ひとりひとりの追求意欲の高まりや追求の質の深まりにつながったか。

(1)個人観察の内容を分類すると、資料Ⅴのように本単元における指導内容とひとつひとつとかわった内容であった。授業記録(9/12)は、7名の子ども(10枚)が農薬散布を観察していることから構成した学習である。農薬散布の現象面を見ているだけなので、イネの状態や天候との関係的な思考をさせようと意図した授業を試みた。学習の中で、子どもたちは、関係的に事象をとらえる思考ができた。

(2)よく記録を書くが、共同思考の場面では、なかなか参加出来ないタイプの子どもがよくいる。本時では、農薬散布を観察した子どもひとりひとりの記録を学習場面に位置付け発表させることができた。しかし、このことですぐにその子の意欲につながったかは、即断出来ない。しかし、個人の追求を1時間1時間の学習に位置づける積み重ねが、個や集団の追求意欲の高まりや質の強まりに大きくかかわっていると考える。

#### ＜参考文献＞

- 授業分析の理論と実務 黎明書房1967
- 社会科の教材構造 明治図書1964

#### 資料Ⅵ 単元終了後の児童の認識 (資料Ⅰとの比較)

○ お米はどんなにしてつくりですか。  
お米は、6月(つゆ)になえを田にうえて、そだてます。夏にはしょうどくのくすりをまき、水のせわや草とりなどどんどん手入れをしています。秋になるとかりとったいねをすずめに食べられないようにしてほします。うかの人が、気をつけたり、しんばいなことは、びょう気になったり、虫などに食いあらされないかです。きせつは、あついさむいがいねにきちんとあわせるように、雨、くもり、はれがどれも強すぎないようにということです。お米をつくる人は、いつもお米をとでもだいじにそだてています。



ぼくが育てたイネ